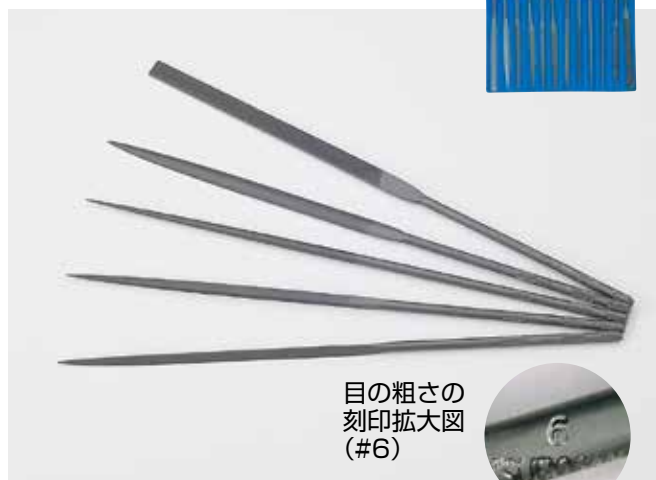


精密ヤスリ

PRECISION NEEDLE FILES

規格表 STANDARD TABLE

DIMENSION	TYPE	セット SET	平 HAND W × T mm	半丸 HALF ROUND W × T mm
200 × φ 3.7	5本組 5-PCS	—	7.2 × 1.3	6.3 × 2.2
kg - 25pcs	0.50	0.52	0.50	
No./1set	5 (each 1)	5	5	
ITEM No.	ST 0055 * T	HI 0055 * T	HA 0055 * T	
180 × φ 3.5	8本組 8-PCS	—	7.0 × 1.3	5.2 × 2.1
kg - 40pcs	0.55	0.60	0.55	
No./1set	8 (each 1)	8	8	
ITEM No.	ST 0085 * T	HI 0085 * T	HA 0085 * T	
160 × φ 2.9	10本組 10-PCS	—	6.0 × 1.1	4.5 × 1.8
kg - 50pcs	0.47	0.50	0.47	
No./1set	10 (each 1)	10	10	
ITEM No.	ST 0105 * T	HI 0105 * T	HA 0105 * T	
140 × φ 2.4	12本組 12-PCS	—	5.0 × 0.9	4.0 × 1.4
kg - 60pcs	0.35	0.36	0.35	
No./1set	12 (each 1)	12	12	
ITEM No.	ST 0125 * T	HI 0125 * T	HA 0125 * T	



目の粗さの
刻印拡大図
(#6)

極細ヤスリ

VERY THIN HAND DITCH FILES

340

規格表 STANDARD TABLE

L	平 HAND W × T mm	半丸 HALF ROUND W × T mm	丸 ROUND W mm	角 SQUARE W mm	三角 TRIANGULAR W mm
150L 40 ℓ	2.8 × 1.7	2.5 × 1.2	φ 2.0	2.0	3.0
kg - 120pcs	0.63	0.64	0.57	0.57	0.64
No./1set	12	12	12	12	12
ITEM No.	GHI 1502	GHA 1502	GMA 1502	GKA 1502	GSA 1502



PRICE-340

ライン丸ヤスリ

LINE ROUND FILES

353

規格表 STANDARD TABLE

mm	W mm	1set pcs	kg - 120pcs	BOX pcs	ITEM No.
100	φ 0.8	12	0.16	120	LMA 0856
100	φ 1.2	12	0.22	120	LMA 1256
100	φ 1.5	12	0.26	120	LMA 1556
100	φ 2.0	12	0.38	120	LMA 2056
100	φ 2.5	12	0.46	120	LMA 2556



PRICE-353

やすり八題 ③

荻山 信行

伝世品の錯（やすり）は、奈良・正倉院に五本ある。南倉の工匠具の三本と、北倉の十合鞘御刀子（じゅうござやのおんとうす）の二本である。

『正倉院の金工』、『正倉院の刀剣』を参照すると、工匠具の錯は、当時の工人が木工細工が彫金細工に使用したものといわれている。三本のやすりの長さは木製の柄を含めて、いずれも26㌘ぐらいである。やすり本体は5～10㌘、幅は5～13㌘、厚さは1～4㌘である。現在の組やすりの平形に近い形状である。

一号錯は、本体がゆるやかな曲面を持っているこてやすりで、凸部を削るのに適している。やすり目は単目である。二号錯は、勝手下がりという右下がりの斜線を連続させた単目である。コバ（側面）にも目を切っている。三号錯はもっともやすりらしい。本体の長さは10㌘あり、やすり目は両面に刻んであり、一見してやすりと分かる。コバは鋸（のこぎり）の目のように切っており、押した時に削れるようになっている。

北倉の二本の錯は十合鞘御刀子（刀子七本、やりがんな一本、錯二本）

正倉院の伝世品

としてひとつの鞘に納められている。この二本のやすりは工匠具の三本と違い、造りも丹念で気品がある。

十合鞘七と呼ばれる錯は、全長16㌘あり、やすり目を切っている部分は10.5㌘である。本体とコミの交わるケラ首は、八角になっていて、手の込んだ仕事ぶりがうかがえる。やすり目は一見鮫（さめ）の皮のようにごつごつとしているが、横に規則正しく並んでいる。現在の鬼目（わさび目）と思われる。

他の一本の十合鞘九錯はわずかに長く19㌘である。ケラ首は剣（く）り状で丸形である。やすり目も七錯と同じ鬼目である。

正倉院には、やすりの目を切ったと思われる鑽（たがね）が数多くある。それらの頭部はまくれ、使用の激しさを物語っている。

（広島県立西部工業技術センター主任研究員＝呉市）

緑地帯 3. 9. 30 中国新聞より